

2020年

増えてくるのは こんな働き方

5人の
“先進事例”
から探る

社会貢献意識や地元志向の高まり、女性の台頭、グローバル化など
2020年に予測される動きのなかで注目される新しい働き方とは？
時代を先取りしている5人の事例を紹介します。



リクルートワークス研究所
研究員
戸田 淳仁

会社を選ぶのではなく
働き方を選ぶ時代に

2020年の労働・雇用環境の変化は働く人たちの意識をも大きく変えていきます。象徴的なのが、「会社のためでなく社会のために」と考える若者の増加です。

「現段階でも会社で働くことに魅力を感じず、社会のためになるような働き方をしたいという大学生が目立っています。NPO、社会起業家などの選択肢が有力になっていく可能性はありますね（戸田研究員）

都市部の大企業中心、男性中心、正社員中心、年功序列の価値観は揺らぎ、働き手の意識も多様化。決まった一つのコースがあるというのではなく、それぞれが自分の価値観を軸に、会社というよりは働き方を選ぶ時代になっていくのです。

「親世代からみると不安な時代かもしれないませんが、今の若者はすでに厳しい時代の中で生きています。その中で自分なりの幸せをどう模索していくかという知恵は親世代より育っているはずですよ」（同）

現実にごうした変化はすでに始まっており、いち早く時代に対応した働き方で活躍している人たちもいます。2020年にはスタンダードになっているかもしれない、5人の働き方をみていきましょう。

CASE.1

地域に入って まちづくりを仕事に

株式会社エマリコにたち
代表取締役
菱沼勇介さん



1982年生まれ。神奈川県・私立栄光学園高校、一橋大学商学部卒。大学時代に授業、サークル活動を通して、国立の商店街活性化に取り組み。卒業後は三井不動産に入社するが、3年で退社。コンサルティング会社を経て、国立に戻る。2011年には株式会社エマリコにたちを立ち上げ、「くにたち野菜 しゅんかしゅんか」をオープン。自称「まちづくらー」。

「自分がいる価値」を求めて
コミュニティビジネスへ

JR国立駅近くにある「しゅんかしゅんか」は国立市や国分寺市でその日に穫れた野菜などを売る地産地消のお店。
「国立にはいい農家があるのに地元の人に獲れたて野菜を提供する仕組みがない。商店街にも个性的な小売店が必要。それなら自分たちが農家と商店街をつないで盛り上げていこうと。農家を応援することは地元の農地を守る意味もあります。そんな狙いでこの事業を始めたんです」

こう語る経営者の菱沼勇介さんは元大手企業社員。しかし、大手の組織・仕事に違和感を覚えて退職。大学時代、まちづくりにどっぷりかかっていた菱沼さんは、国立に人脈もあり、ごく自然な選択で地域のために働く道を歩み始めました。

「突き詰めるとそこに自分がいる価値があるかどうかということ。自分のしたことが100年後に意味がないことであつてほしくないという思いがありました」

自ら先頭に立って理想を実現していく働き方も合っていました。「商店街のこぢんこぢんとした感じが好き」と語る若手リーダーは今日も国立の街を駆け回ります。

菱沼さんへの Q&A

■活動の全体像は？

株式会社のほかNPOなども
「しゅんかしゅんか」とワインディング「くにたち村酒場」を運営するエマリコくにたちの活動が8〜9割。そのほか、学校給食への地場野菜納入事業を手掛けるNPO、コミュニティビジネスを支援する組織の運営など多角的にまちづくりにかかっています。

■収入は気にしない？

大企業並みに稼ぐことは可能
今のビジネスを軌道に乗せて大手にいた当時の収入を超えないといけないと思っています。後に続く人たちを増やすためにも、ソーシャルビジネスの成功例を作っていくことはボクらの大切な役割。決して不可能なことではないと思っています。

■高校生へのアドバイスを

経済や経営を勉強しておく
ソーシャルビジネスやNPOは理想だけが戦略がないために失敗することが多い。その意味で、ボクの場合、大企業でビジネスを経験したことがプラスになっています。また、経済や経営など資本主義社会の基本的な仕組みは勉強しておくべきですね。

安原さんへの Q&A

■現在の活動の原点は？

高校進学時に感じた教育格差
小中と地元の公立校に通っていたのですが、かなり荒れた地域でした。高校は国立大学付属高校へ。すると周囲の勉強に対する意識がまるで違う。その差はなぜ生まれるのかと考え、環境や出会った先生の影響が大きいと思いついたのが原点です。

■NPOで培われる力は？

ゼロから仕組みを作る力

NPOはゼロから新しい仕組みを作るのが仕事。それしかありません(笑)。また、常に「何のためにやっているのか」「その先に何かがあるか」を考えながら活動しています。この経験とそこで培われたマインドは民間企業などでも通用するものだと思います。

■今後のキャリアは？

課題意識に応じて柔軟に

NPOから民間、行政へというキャリアは日本でももっと広がるべき。自分がその先鞭をつけたい。その後でTFJに戻る道もあります。そのときの課題意識や自分の能力に応じてキャリア選択は柔軟に考えています。教員になる夢もまだもっていますよ。

CASE.2

「会社」ではなく 「社会」のために働く

特定非営利活動法人 Teach For Japan
学習支援事業本部 本部長
安原健朗さん

1988年生まれ。大阪教育大学附属高校池田校舎、神戸大学発達科学部数理情報コース卒。教員と公務員の両視みで東京大学公共政策大学院へ進学。大学院の1年次からTeach For Japanの活動に学生スタッフとして参加。国家公務員1種にも合格したが、Teach For Japanで働くことを決め、大学院在学中の2011年8月から常勤職員に。大学院は2012年3月に修了。



目標を共有する仲間とともに
教育格差の解消に取り組む

高校以来「日本の教育格差を解消したい」と考えてきた安原健朗さん。当初は教員になることを意識していましたが、官僚、NPOといった選択肢が浮上する中、選んだのはNPO法人Teach For Japan(TFJ)でした。

「官僚になつた場合、今すぐ自分のやりたいことができるわけではありません。でも、十分な教育を受けられない子どもは今もいるんです。早く課題解決に取り組むならNPOだと思いました」

TFJは、独自に研修した教員を全国各地に紹介し、地域の教育格差問題解決や新たな問題発見につなげる事業と、大学生などが勉強の遅れている子どもを指導する学習支援事業に取り組んでいます。安原さんは、教師紹介に関する自治体との折衝、学習支援事業の運営管理などを担当。全国の教育委員会を精力的に回り、ゼロから新たな仕組みを提案する仕事は、常に「ワクワクする」と語ります。

「教育格差解消にかける思いは誰にも負けません。それに目標を共有する仲間とも出会えた。その2つが私の原動力ですね」

中川さんへの Q&A

■ロボットとの出会いは？

大学1年のとき運命の遭遇が！

大学入学直後、ロボットサークルの勧誘でマイクロマウスという小型ロボットを見て、「これを作りたい!」と一目惚れしました。ちなみにサークルで同学年の女子は私だけでした(笑)。当時は4年かけてみんなで1台作るのがやっとでした。

■日本科学未来館での仕事は？

ASIMOなどの展示を企画

役割としては、最新の科学技術を一般の人々にわかりやすく伝えるサイエンスコミュニケーター。ロボット以外にも幅広く、展示の企画などに携わりました。当時、ASIMOのデモンストレーションにかかわった経験は、今の仕事にも生きています。

■会社を作った理由は？

同じ目的の仲間を集めるため

もちろん自分がやりたいことをやりたいから会社を立ち上げたんですが、自分1人ではできないことに限界があります。自分にはない情報や技術をもっている人を集めることで、さらに進むことができる。それが会社を立ち上げた一番の理由ですね。

CASE.3

専門性&女性の視点を 武器に会社設立

株式会社アルティ
代表取締役
中川友紀子さん

1971年生まれ。東京・私立法政大学女子高校、法政大学工学部電気工学科計測制御専攻(学科・専攻名は当時)卒。同大学院工学研究科電気工学専攻修士課程修了。東京工業大学などの研究者、日本科学未来館展示サブリーダー、ロボット開発会社を経て、2005年にアルティを起業。Googleの開発者会議にたびたび招かれ、Androidを使ったロボット技術などを発表。



最先端&サービスを追求する
ロボットベンチャー

ロボット開発にサービスの視点を――。株式会社アルティを経営する中川友紀子さんは、そんな新しい発想でイノベーション(変革)を仕掛けるロボットエンジニアです。上の写真で中川さんが抱きついている「ネコ店長」はそのシンボルともいえるロボット。

「ロボットに着ぐるみを着せる発想は男性開発者にはないみたいで。女性ならではのアイデアだとよくいわれますね」

ロボット、人工知能の研究者としてキャリアを重ねてきましたが、ロボットとユーザーの関係に関心が広がり、ビジネスの分野へと活躍の舞台を移しました。ロボットが生活の中で人々に親しまれるにはどうしたらいいかを考え、一般向けホビロボ教室や軽量ロボットの開発などに取り組みできました。ネットワークを活用してスマホで操作するロボット技術など最新技術の開発でも世界が注目する成果を挙げています。

「未開拓の領域で先頭を走るのとはすごく大変なこと」と中川さん。しかし、誰もやらないことにこそチャンスがあるという戦略と、何より「好きだから」という思いで突き走り続けます。

相部さんへの Q&A

■自分の核となる技術は？

店名にもしている「FPGA」

大学4年のとき、回路構成を自由に書き換えられるLSI(半導体集積回路)「FPGA」に出会い、「この技術があれば何でも作れる!」と取り憑かれました。大学院でもFPGAを使った画像認識装置の開発に取り組み、今もFPGAを使った開発が仕事の中心です。

■“ファブラボ”とは？

一般に開放された研究開発の場

マサチューセッツ工科大学(MIT)がものづくりの可能性を広げるために提唱し、世界中に拡大している自由な研究開発の場のこと。一般の人が高額なものを含む工作機械を無料で利用できるのが特色で、技術者などの交流の場にもなっています。

■高校生へのアドバイス

ドクターに進む意味は大きい

研究者として大学に残らない場合でも博士課程に進む意味は大きいですね。ドクターの肩書は仕事や開発資金を得るうえで有効です。論文を書く際には自分のそれまでの研究を客観的に評価し直すため、高いレベルで思考力が鍛えられますから。

CASE.4

仕事と個人活動の 境目なく自由に働く

株式会社SUSUBOX
代表取締役
相部 龍之 さん

1975年生まれ。東京・私立多摩大学附属聖ヶ丘高校、工学院大学工学部第1部電子工学科(学科名は当時)卒。筑波大学大学院理工学研究科理工学専攻修士課程(研究科・専攻名は当時)、同システム情報工学研究科コンピュータサイエンス専攻博士課程修了。大学4年以降FPGAを使ったハードウェア開発がテーマに。筑波大学研究員を経て、2012年にSUSUBOXを起業。



仕事場であり技術者との交流の場でもある「ファブラボ」を設立

相部さんは電子機器の基板開発などを手掛けるエンジニア。独立後は企業からの受託開発をメインに個人で活動しています。フリーでの活動自体は腕のあるエンジニアなら珍しくありませんが、相部さんがユニークなのはファブラボ「FPGA iC A F E」を立ち上げたこと。自身の仕事場であると同時に、毎週日曜にはエンジニアなどのコミュニティスペースとなるこのカフェが活動に広がりを与えています。

「ウチにはレーザー加工機などの開発機材がそろっているの、本職のエンジニアの方々が趣味で自分の好きなモノを作るために集まっています。こうしたお客さんとの交流は刺激的で楽しいですし、お客さんからの依頼や紹介で仕事にもつながっています」

相部さんの仕事ぶりが興味との境目はありません。小3で電子工作に触れて以来、ハンダごてを握るときのワクワク感は今も同じ。それを何より大切にしてきた結果が、今のワークスタイルなのです。

「何がいつで上司がいらない(笑)。自分の好きな時間に好きな開発に打ち込める。こんな幸せなことはないですね」

藤原さんへの Q&A

■英語は得意科目だった？

英語の成績は良かったが…

学生時代、英語の成績は良かったんです。ただ、大学の卒業旅行でヨーロッパに行ったとき、話せるだろうと思っていたら、まるで言葉が出てこない。それがショックで、その後TOEIC®テストの勉強をしたり、再度短期留学したりして、会話を磨きました。

■語学アップのコツは？

コミュニケーションすること

例えば、IBM時代は工場があった関係でタイ人とのやりとりが多かったのですが、彼らの話す英語はまた独特。ひとくちに英語といっても国ごとに癖もあるので、正確な発音や文法にこだわらず、いろんな人とコミュニケーションすることが大事です。

■高校生へのアドバイス

グローバル環境で働く準備を

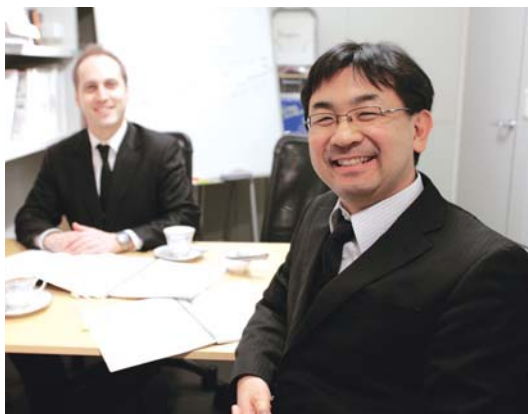
日本の人口は今後急速に減少し、国内市場は縮小。中国、ベトナム、インド、インドネシア、ロシアなどの新興国とのビジネスが増え、グローバルな環境で働くことが当たり前の世の中になります。そのための準備はしっかりしておいてください。

CASE.5

ボーダレスな環境で グローバルに働く

EQパートナーズ株式会社
コンサルタント
藤原 敬行 さん

1971年生まれ。埼玉・私立慶應義塾志木高校、東京大学工学部機械工学科卒。同大学院工学研究科機械工学専攻修士課程修了。日本IBMに入社し、生産技術部門、開発部門で働く。その後、ソフトウェア商社の技術営業、システム開発会社の経営管理を経て、EQパートナーズへ。2社目の在職中にオーストラリア・ボンド大学大学院 MBA(通信制)取得。



外国人が3割以上の多国籍な職場会議も普段の会話も英語が飛び交う

EQパートナーズは、企業に対してグローバル化への対応やグローバル人材育成などに関するコンサルティング、研修を行う会社。シンガポールにもオフィスを持ち、国際的に事業展開している企業です。藤原敬行さんは、豊富な国際ビジネス経験や高い英語力を買われて、2011年から同社で働いています。

日本人社長が経営する日本の会社ですが、「自分たち自身もグローバル環境を肌で感じないと」という主旨で、メンバーはインターン生も含めると3割以上が外国人。アメリカ、フランス、シンガポール、中国、インドといった多様な国の出身者が集まっています。

「外国人講師コンサルタントが加わる会議は英語ですね。普段の会話は英語の場合もあれば日本語の場合もあります」

文化的背景が違うので、日本的なあなたの呼吸は通じません。相手の発言内容を自分の言葉で確認し、自らも論理的に話すように意識していると藤原さん。

「世界では言いたいことははっきり言うのがスタンダード。日本人と日本語で話すより気は使いません(笑)。仕事もしやすく、刺激的で心地いい環境ですね」